

財団だより

# 多摩川

1993.9 第59号



コイ（コイ科）  
多摩川では中～下流域に数多く  
生息する。水の汚れに強く、多  
摩川での主な釣り対象魚の一つ。



用水路を学校の裏庭と一体整備した向島用水  
日野市高幡、潤徳小学校

## ■ 多摩川現風景 ■

### (15) 日野の生きものの棲む水路づくり

この春、日野市の高幡にある潤徳小学校の裏手を流れる向島用水が、水辺の自然に触れあう場として整備された。学校の裏庭に接する水路を広げたり、子供たちが水辺に近づき易いように緩やかな勾配にしたりして、学校の環境学習や課外活動に利用できるよう工夫されている。

子供たちの川での遊びは、事故防止のため沿川の小中学校では禁止されている。従って、川に遊びに来ている子供たちの多くは、川から遠く離れた学校の子供たちで、皮肉なことに川の近くの子供たちは遊べないことになっている。片やいま学校のカリキュラムの中で、環境問題や地域生活などが取り上げられつつあり、川や水路を学習フィールドとして活用したいという要請が多くなっている。こうした矛盾の中で身近な水路を利

用してということでもあろうか。川離れが川を荒廃させていることも聞かすが、少しでもこうした試みがなされることで、少しずつ生きた水路や川の触れあいが再開されることは有意義なことと思われる。

#### ● 関連する財団の助成研究（Noは報告書番号）

##### 〈一般研究〉

- ① 児童・生徒に自然環境を考えさせるための水質調査  
1980年 前田 穂 都立教育研究所（No.11）
- ② 地域（多摩川中流域）の自然を教材化に生かした理科教育  
1982年 花岡紀子 府中市立本宿小（No.22）
- ③ 多摩川の自然を小学校の理科教材として活用する方法の研究  
1983年 加藤和俊 稲城市立稲城第三小（No.28）
- ④ 河川の学習機能に関する研究  
1990年 並木直美 よこはまかわをを考える会（No.73）

## 多摩川散歩

### ●無数のわき水や沢が流れ込む平井川 その1

小山 睦子

日の出山(902m)の山腹から湧き出る水を水源として、無数の湧水を集めながら東へ向かって流れる平井川は、東京都内では自然の形態をよく残した最後の川として、多くの人々から親しまれている。全長約16.5kmのこの川は、河口近くになると川幅も50m近くになり、高さ数m~十数mの崖にぶつかりながら蛇行し、五日市線鉄橋下で多摩川と合流する。

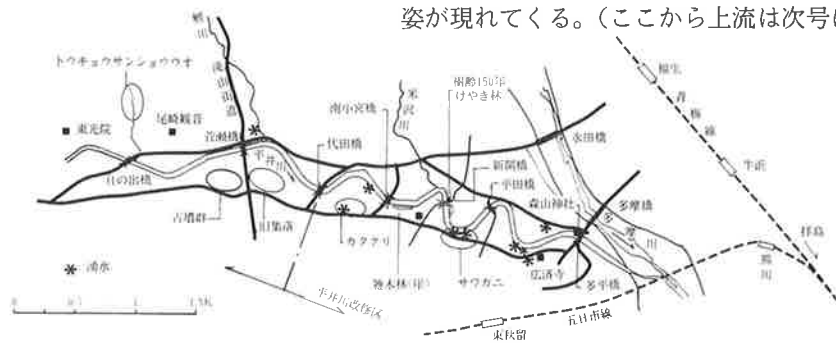
JR青梅線福生駅から、五日市行き(秋川市役所経由)のバスに乗り、多摩川を渡ると、右手前方に草花丘陵、左手には水田の広がり目に飛び込んでくる。この付近は、江戸時代に鮎獺の瀬張場をめぐる境界争いがあった所で、以後多摩川左岸から草花1番地(現在秋川市)が始まる。

バスを「多摩橋」で下車し多西橋を渡る手前の道を右に下ると、森山神社下になる。神社の高台から眺めると、眼下にコンクリート護岸された平井川が一眺される。数年前から行われた改修工事第一期の始点である。

多西橋を渡り、梨木坂を登る手前で道を右に曲がると広済寺に出る。この寺には、江戸時代以前から使われているという湧水があり、ここで手や顔を洗うとほっと一息つける。平井川崖線には湧水群があるが、こんな高台から冬でも枯れることなくトウトと水が湧き出しているとは、なんとも不思議である。

さらに上流へ、平高橋右岸の遊歩道を進むと、ゴ

〈案内図〉



ボゴボという音が、草叢から聞こえてくる。靴の濡れることを覚悟して、思いきってクレソンの茂る湿地を渡り崖に近づくと、大きな木の根の下からザアザアと水が湧き出している様に驚かされる。

この一帯までくると季節により、様々な草花、踊り子草、彼岸花の群落、沢ガニ、蝶の乱舞などと出会える。

新開橋にたどり着くと、左岸に樗や榎などの大樹の林がある。これは約150年前、私達の祖先が水害防備林として植えたという。樹々の下に立つと、夏でも涼しい風を感じ、思わず深呼吸したくなる。土、草叢、川砂利、水辺へとなだらかに溶け込んで行く川本来の姿がここにはあり、瀬や淵も残っている。それら全体が、水田風景としっかりと調和しており、自然発生のホタルが細々とではあるが生き続けている。これらの風景も、今年の改修工事計画がそのまま進むと、消えてしまうかもしれない。

「南小宮橋上流は、都市化された公園となったが、公園入口の湧水が出る崖添いの雑木林には、カタクリが今も僅かに残っている。公園ができる以前は、この辺一帯にカタクリが群生していた。ここから、上流の代田橋まで600mは、改修により東京都が「多自然型」と称する川となってしまった。山から運んだ大きな石を並べ、コンクリートで固めただけで、「多自然型」と言えるのかと疑問に思う。ススキの河原、幼児でも近づける水辺、わんど、ヤゴの生息地、しじみの取れた用水路、水田…全てが消えた。

代田橋上流から、やっと、東京の川とは思えない、ゆったりとした雰囲気をもつ本来の平井川の姿が現れてくる。(ここから上流は次号に)

## 私と多摩川

むつ小川原開発(株)常勤顧問 西川 喬



財団主催の「多摩川実査」に参加する筆者  
('92年10月)

本省において全国の河川と同様一般的に対応してきた多摩川について、私が具体的に取組みを始めたのは、昭和40年関東地建の河川部長に就任してからであるが、その最初の仕事が河川敷の開放であった。

何しろ全国で初めて前例のないことで、本省にいくらお伺いをたてても、ただ開放しろというだけで具体的な指示は何も出てこない。そこでたたき台としての一案を提示したらよしこれでやれとのこと、それがあの第一次多摩川河川敷開放計画である。勿論案を作るに当ってそれなり思想と理屈を貫いてやったもので、決して場当りのものではない。

先ず河川敷開放世論のきっかけをつくったゴルフ場問題であるが、直ちに取りあげてしまうということもできない。そこで①パブリックにすること、②9ホールにすることの案を出したら省内から猛反撃を喰った。その理由はゴルフは18ホールあって初めてゴルフであって、9ホールはゴルフではない、お前はゴルフをやらないのでそういう馬鹿なことをいうのだというのであった。私は18ホールやりたいものは、山のコースへ行け、貴重な多摩川の河川敷に来て貰わなくて結構だと押切った。事実私の所へは、大田区の中小企業の

方々から“我々は時間も金も体力もない。ただ老人の健康維持のため、どれだけでもよいからクラブの振れるところを残してくれ”との切実な陳情があったのである。

ゴルフ場の開放は、東急がまあ問題の火付けになったということもあったとは思うが、河川敷地の公共性を理解して真先に了承してくれたので、他も皆簡単に解決した。ただ前の陳情の対象であった六郷ゴルフ場は、大田区役所の占有で経営を六郷ゴルフに委託していたもので、後に両者の間が裁判沙汰になったのは残念であった。なおこのゴルフ場開放というのが実は退治の張本人となつて、私は遂にゴルフを始める機会を失ってしまったのである。

次に企業の占有していたグラウンドであるが、これについては、ウィークデイの何曜日かを決めて開放させることとした。正直なところこれは役人の常套手段で、ウィークデイの開放ではほとんど実効はないことははっきりしているが、開放させたという実績は残るのである。何分にも昭和40年当時占有状態の最も悪かったのは公共団体(区)の占有であつて、ほとんど放置状態に近く企業の占有個所が目立つ結果となっていたもので、公共団体が必要な金をかけるのが先決で、そして整備してもなおグラウンドが不足するのであれば、初めて企業に返還を求めるのが筋であると思われるが、世論にそこまでの配慮を望むのは時間がなければ無理なので、苦肉の策として部分開放の悪知恵を働かせたのである。

この時巨人、東映の練習グラウンドは除外した。これも疑義をはさんだものが大分いたが、私は後樂園には行けない子供達が沢山おり、長嶋、王にあこがれて多摩川のグラウンドに来る子供達のことを考えようではないかと方針を貫いた。

この他二子玉川の読売飛行場、自動車練習場、関東競馬場等々いろいろな問題があつたが紙数がつきた。ただこれだけの問題が、世論のバックアップがあつたとはいえ、一銭の補償も払わずに済んだことは、内心ひそかに自画自賛している。

## 甦れ！多摩川

## ■ 平瀬川に行く

## 山道省三

世田谷区の二子玉川の対岸に、平瀬川の水を浄化するための施設が完成したのは、平成元年のことである。これは先に完成した野川と同様、高水敷地の地下に礫の槽を設け、礫に付着する藻類やその他の微生物で汚れた水を浄化しようとするものである。平瀬川の場合は、野川での経験から礫槽内に空気を送り込み、より浄化効果を高めようとする点で新しい試みといえる。

この平瀬川は川崎市麻生区東百合丘を水源とする約10km程の一级河川である。流域面積27.05km<sup>2</sup>。この水源地域はすっかり住宅地に変貌してしまい、わずかに川幅2m程の源流部は、三面張のコンクリート水路となっている。源流は民地の小さな谷戸地に暗渠となって吸い込まれるように消え、下水とおぼしき水が音を立てて流れている。この三面張水路は約1.5km程続き、やがてコンクリートブロックや切石積の仕様に変わるが、河口まですっかり都市排水路の景観となっている。

周辺の様子を眺めてみると、かつてこの川が蛇行しつつ流れ下った谷戸は、多摩丘陵特有の低い丘と狭く入りくんだ谷戸地形を思わせるかすかな痕跡が見られる。それは、両岸に連なる崖線の緑地であり、わずかに残された田畑である。おそらく20年程前までは、交通不便なこの地はとり残された形で田園風景が広がっていたはずである。

平瀬川の河川改修は、昭和の初期に始まり、下

〈案内図〉



流部河道の変更、二ヶ領用水の改良事業などにあわせ逐次進められてきた。もともとの河道は、津田山の台地をくり抜いて作られたトンネル部分から南下して、今日の溝ノ口の市街地を通過していたが、昭和12、3年頃からトンネルで多摩川への流路がつけられた。このトンネルを抜けた所が久地で、1600年頃に開削された稲毛、川崎二ヶ領用水と交差する。二ヶ領用水は平瀬川の川底をくぐり久地の円筒分水樋へと湧き上る。サイフォンの原理を利用したもので、優れた土木技術として残されているので訪れてほしい所である。ここで平瀬川は二ヶ領用水の落水水を一部加え多摩川へと合流する。この合流地点にラバーダムを設け、平常時には全ての水が下流部の高水敷に設けられた礫間浄化施設へと導かれ、浄化の後、多摩川へ放流されている。

平瀬川はすでにその全川が河川改修され、自然の地形や河道を見ることができない。上流地区はまだ暫定改修とはいえ、今後さらに拡幅や河道の直線化が予想される。さらに市街化の進む地区からの汚水の流入があり、二重苦、三重苦の川となりつつある。しかし、その中にあって、美しいルリ色のカワセミが草むらから飛び出すのを見た。せめて上流地区でも従来の工法とは違う、景観や生きものに配慮した工事ができないものだろうか？

一部に設けられた親水施設も良いだろうが、かつての平瀬川の原風景を残しながら改修する手だては、すでに可能な時代になっている。

## 財団からのお知らせ

## 選考委員紹介

財団では去る5月理事会において選考委員の改選を行い下記8名が選任されましたのでご紹介いたします。

氏名	沼田 真	氏名	齋藤 尚久
現職	(財)日本自然保護協会理事長 千葉大学 名誉教授	現職	(財)河川環境管理財団 顧問
専門	生態学	専門	河川工学
主な著書	生態学方法論 (古今書院) 自然保護と生態学 (共立出版) 生態学辞典 (築地書館) 環境教育論 (東海大学出版会)	主な著書	グラフィックくらしと土木 第2巻 「山と川と海」(共著・土木学会編) 新体系土木工学 第48巻「土木行政と関連制度」(共著・土木学会編) 新体系土木工学 第73巻「河川の計画と調査」(共著・土木学会編)
氏名	宮川 公男	氏名	小倉 紀雄
現職	一橋大学 商学部 教授	現職	東京農工大学 農学部環境資源学科 教授
専門	経済学、経営学	専門	地球化学
主な著書	意思決定の経済学Ⅰ・Ⅱ (丸善) オペレーション・リサーチ (春秋社) 基本統計学 (有斐閣)	主な著書	水質調査法 (共著・丸善) 調べる・身近な水 (ブルーバックス) きれいな水をとりもどすために (あすなる書房)
氏名	増井 光子	氏名	涌井 史郎
現職	東京都恩賜上野動物園 園長	現職	(株)石勝エクステリア 代表取締役
専門	獣医学・動物行動学	専門	造園学
主な著書	日本の動物 (小学館) 動物のいのち (築地書館)	主な著書	都市の庭 (ビッグ社)、景観創造のデザイン ンデベロップメント (総合ユニコム)
氏名	中村 良夫	氏名	新井 喜美夫
現職	東京工業大学 社会工学科 教授	現職	(財)とうきゅう環境浄化財団 専務理事
専門	景観工学	専門	経済学
主な著書	土木空間の造形 (技報堂) 景観学入門 (中央公論社)	主な著書	市場調査 (日本事務能率協会) マーケティング入門 (東洋経済) 経営戦略の革新 (東洋経済) 現代を読む本 (東洋経済)

## 寄贈文献の紹介

## ● 「多摩学のすすめ」Ⅰ・Ⅱ

東京経済大学多摩学研究会 編著 (Ⅰ 1991年11月  
Ⅱ 1993年2月)

(株)けやき出版 発行 TEL0425-25-9909

東京経済大学で開講された市民大学講座を  
まとめ発刊したもので、Ⅰは新しい地域科学  
の創造、Ⅱは新しい地域科学の構築の副題が  
付いており、多摩地域の歴史・文化・産業、  
自然環境問題等幅広く取り上げている。

## ● 「多摩百年のあゆみ」

多摩百年史研究会 編著 1993年4月

(財)東京市町村自治調査会 発行 TEL0423-82-7722

多摩東京移管100周年を記念して刊行された  
本書は、三多摩移管問題を初めとして、多摩  
の政治、経済、産業、文化等あらゆる角度か  
ら100年の変遷をまとめた書である。

## ● 写真集 目でみる多摩の一世紀

多摩百年史研究会 編著 1993年4月

(財)東京市町村自治調査会 発行 TEL0423-82-7722

「多摩百年のあゆみ」姉妹編として刊行し  
たもので、明治、大正、昭和にわたる貴重な  
写真が収録され、各時代の風景、生業として  
の林業、農業、養蚕、漁等くらしの変遷が網  
羅されている。

## 多摩ルネッサンスシンポジウムに参加して

多摩ルネッサンスシンポジウムが今年も行われた。1984年から毎年行われ、今回は第10回である。多摩川流域の大学を中心として多摩地域の科学技術の振興のためのルネッサンス活動である。

現在、多摩川流域には70を超す大学が集中しており、日本における代表的な学園都市を形成している。

今回の全体テーマは、「多摩21世紀への挑戦」である。7月1日から11日まで各種の催しが各大学、会場で行われた。

7月5日府中市の東京農工大学 農学部 講堂において催しの一つとして「多摩の環境と市民生活」をテーマに講演とシンポジウムの集いが行われた。東京農工大学 農学部には多摩地域の大学の中で珍しく「環境資源学科」が設けられており、環境問題において大学の今後の活躍が期待されている。

午前中は高橋 裕先生（東京大学名誉教授・芝浦工業大学教授）の「水と人間—多摩川を例として」の講演があり人と水との最初の出会いを玉川上水、小内ダム、調布堰について話され、上水道を中心とする首都圏の住民の川との出会いを話された。洪水との闘いについて粕江水害、それに続く水害訴訟について治水での川とのかかわりあいについて。農業社会における水、工業社会における水等、利水面での川とのかかわりあいについて。そして更には憩いの場としての河川空間についてなどをわかりやすく話された。

続いて、細見正明先生（東京農工大助教授）により「水生植物による水質浄化」についての講演

があり、ヨシを生かした湿地のフィルター効果による水の浄化の提案がなされた。

特に生活雑排水の浄化についての調査結果は著しくBOD等の汚染指標についての改善がみられる。

ヨシの群落は河川の景観のうえからも、また多様な生物の生息場所としても有効であり、総合的な水辺環境の改善手段として検討すべき手法であろう。現実的な提案であり、ヨシが川の自然な植生にふさわしいものであることが理解できた。

今回のシンポジウムについては、あいにくの強い風雨にもかかわらず200人を超す参加者があった。行政関係者が3割、学生を中心とする大学関係者が3割、民間会社団体が3割、主婦など一般市民が1割といった構成であった。

学生の参加が多かったことは昨年のシンポジウムに比べ顕著な変化であった。昨年は若者の参加が少ないのは環境問題に関する関心が薄いのではと心配したが実際はそうでもないことがわかり今後に希望が持てた。実行委員、担当大学の積極的な働きかけが功を奏したものと思われる。

現代は各種の情報が飛び交う一方、各人の持ち時間の方は限られているので、なにを選択するかが問題なのであろう。今回のように積極的に主催者側が若者や地域の住民にメニューを提示し選択させる努力をされれば若者も無関心では無いのである。その意味でもこれからも多摩ルネッサンスシンポジウムが大学のキャンパスの外の世界に広く門戸を開き地域住民や若者との交流を積極的に図られること期待したい。

芳村重徳

- ・発行日 平成5年9月1日
- ・編集兼発行 (財)とうきゅう環境浄化財団  
〒150 渋谷区渋谷1-16-14  
(渋谷地下鉄ビル内)  
TEL (03)3400-9142  
FAX (03)3400-9141

